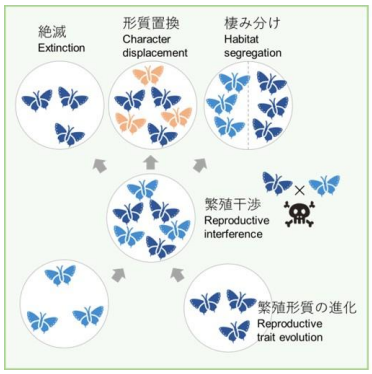
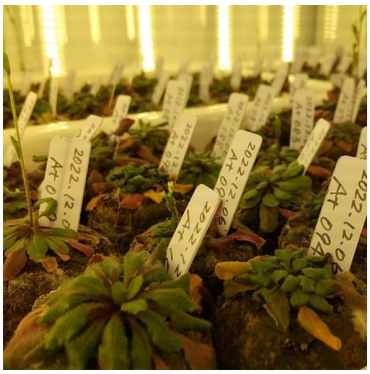
有性生殖の生態学的な副次効果に関する研究

生物科学コース　京極大助





多くの生物にはオスとメスがいて、有性生殖をしています。植物ではオス機能とメス機能が同じ個体の中にあることが普通ですが、それでも有性生殖をしていることに変わりはありません。有性生殖は、同性間の競争や、異性間の関わりなど、複雑な相互作用を生み、多様な繁殖形質が進化する原動力となっています（性選択）。こうした繁殖形質の進化はそれ自体が興味深いだけでなく、生物の分布や数にも影響を与えます。たとえば近縁な２種が分布拡大の際に出会うと、交雑などが生じることがあります。このとき、どちらの種がどちらの種に求愛するか、種間交尾や種間送粉がコストになるかどうかは、それまでにそれぞれの種が進化させてきた繁殖形質の影響を受けます。また、不適応な種間交尾や種間送粉など（繁殖干渉）があると、これらを避ける適応が進化する可能性があります。そうした形質進化が最終的にできあがる群集の構造にどう影響するのかにも興味を持っています。これまで、こうした問題にマメゾウムシ類（昆虫）、タンポポ類、シロイヌナズナ、それに数値シミュレーションを用いて取り組んできました。

キーワード：性選択、性的対立、繁殖干渉